

おわりに

本研究の趣旨を理解いただき、研究へのご協力にご同意いただいたご遺族の方、また、石綿ばく露による石綿小体の測定や CT 検診に参加していただいた関係者の皆様方に心より感謝の意を表します。

平成 16 年に死亡した中皮腫 953 例の人口動態調査死亡票からの解析は分担研究者の青江啓介、平木章夫、三上春夫が担当した。

また、平成 15 年に死亡した中皮腫 878 例のうち、遺族からの同意が得られ、平成 18 年 3 月 8 日までに医療機関からカルテ等の医療情報が送付され平成 17 年度の報告書で報告した症例と、それ以降に情報が得られた追加の症例については、臨床および病理学の専門家が 3 度にわたって検討会を行い、中皮腫の正確な診断法について検討した。この結果は、主任研究者である岸本卓巳、分担研究者の玄馬顕一、加藤勝也、青江啓介と研究協力者の藤本伸一が臨床医の立場から、また、分担研究者の井内康輝と研究協力者の武島幸男が病理医の立場から結果を報告した。

基礎研究として、一般人あるいは肺がん患者の石綿ばく露の指標として、分担研究者である木下博之と大西一男が肺内石綿小体の測定を行い、職業性石綿ばく露との比較を行った。

職業性石綿ばく露に対する傍職業性家庭内ばく露については、主任研究者である岸本卓巳、分担研究者の玄馬顕一、加藤勝也、研究協力者の岡本章一が胸部 CT 画像を用いた胸膜プラークの発生状況について検討を行い、新たな知見を得た。

さらに、分担研究者である瀧川奈義夫、豊岡伸一、丸山理一郎、山崎浩一には、各研究課題に対して適切なアドバイスをお願いした。

最後に、本研究に対して協力をいただいた研究協力者の皆様とカルテ等の医療情報のご提供をいただきました医療機関の皆様に深謝いたします。